

本から始まる伝説

奄美市立屋仁小学校 六年 諏訪 朱音

昼休み、学校の図書館。見慣れた本たちの中で、それは、ふと、かなの目にとまった。

「この本なんだろう。見たことないな。」

かなは、ほこりをかぶったその本を手に取り、不思議そうに本の周りをながめた。表紙は、紙というより何かの動物の皮のようだった。ようし、開いてみよう、と、勇気をもって、その不気味な本を少し遠巻きに開いて見た。表紙をめくると、中は真っ白だ。何も書いていない。かなはおどろいて本をしっかりと持ち直し、目をばちくりさせた。

その時、真っ白な本から緑色の太いつるが出てきて、かなのうでにまきついた。

「わあ、なに。助けてえ。」

かなは叫んだが、そのまま本の中に引き込まれた。ドン。

「いったあい。」

かなは何が起こったのか分からず、おそろおそろ目を開けた。目の前には、きれいな泉と大きな岩。その岩の上で、卑弥呼みたいなかつこうをした女の人が、何かお祈りをしている。女の方はびっくりした顔で、か

なを見ている。

「あのう、あなたはだれですか。」

と、かなが聞くと、

「私は、屋仁に住むミヤテラといっています。今、ムラの人々のために、安全と豊漁を祈っているところなのです。」

その言葉に、かなははっとした。本で読んだ、伝説のミヤテラ様だと気づいたのだ。ミヤテラ様は、一息深く呼吸をして、鏡を手に、またお祈りを始めた。

その時、ビュオービュオーと、強い強い風がふいた。バリン。

「あ、痛い。」

何かが割れた音と、ミヤテラ様の手にあつたはずの鏡が割れ、ミヤテラ様が手を切って、けがをしてしまっていた。

「どうしましょう。お祈りに必要な鏡が……。これを元通りにしなくては、お祈りができません。」

と、うつむくミヤテラ様。

「ミヤテラ様。どうやったら、この鏡は元通りになるの。」

と、思い切ってかなが聞くと、

「この鏡をホノホシ海岸に持って行けば、元通りにすることが出来ます。ホノホシには、不思議な力があ

るのです。でも、けがをしてしまった私では、たどり着くことができません。」

と、ミヤテラ様のか細い声。けがをしているミヤテラ様を見つめ、かなは、

「ミヤテラ様。私が、ホノホシ海岸まで行ってきます。」と自分をふるい立たせて、ミヤテラ様のために、ホノホシ海岸へ向かった。

しかし、その道のりは簡単ではなかった。まず、大きな岩山をこえなければならぬ。高い所が苦手なかなは、後ろを見ないで、前だけを見つめ必死に進んだ。岩山の頂上へたどり着き、後は下るだけ、そう思った。その時、ずるつと足がすべってしまった。

「うわあ。」

ザザザーと落ち始めると、横に、つるがあるのが目に入った。とつさにそれをつかむと、むによつと植物ではない感じ。すると、つるの先から長いキバがキラリ。

「ギヤー、つるじゃなくて、ハブだあ。」

びつくりしたかなは手をはなして、また急降下。気づいたときには、どんどん落ちていく体。もうだめ。かながあきらめかけた時、からだがフワッと宙に浮いた。まばたきをしながら下を見ると、ルリカケスとアカシヨウビンの大群が、かなを助けてくれていた。

「あぶなかったね。どこに行こうとしたの。」

とルリカケス。かなが、ホノホシ海岸を目指していることを話すと、

「連れていってあげるよ。」

と、ルリカケスたちはさらに南へ飛び続けた。

「クルルルルル、クルルルルル。」

アカシヨウビンの鳴き声に目を開けると、下にはホノホシ海岸が広がっていた。鳥たちにお礼を言うと、早速ミヤテラ様に教えてもらった通りに、鏡の周りを石で囲んだ。すると、まぶしい光がかなをおそった。鏡は、ふちから元通りになっていく。ほっとすると同時に、かなは光に吸いこまれ、ミヤテラ様の元にもどってきていた。元通りになった鏡を手に、ミヤテラ様はかなの手を強くにぎった。

「本当にありがとう。また、お祈りができます。」

その言葉を聞いた瞬間、かなはあの本を手に、いつもの図書室にいた。再び、おそろおそろ本を開くと、今度は真っ白ではなかった。そこには、ミヤテラ様のこと、かなが体験したことが伝説となって書き記されていた。本を読んだ後も、まだ残っているミヤテラ様の手のぬくもりを感じながら、かなは今までにない達成感と充実感を味わっていた。

